

---

# 迷宮エトランゼ

月海苔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷宮エトランゼ

### 【Nコード】

N2498X

### 【作者名】

月海苔

### 【あらすじ】

ベットで寝たのに起きたら真上に青空。いったいどうなってんだよ。。  
的な感じで始まるトリップ迷宮ファンタジー。主人公は大学生男子。だらけた生活を送っている典型的バカ学生のゲームヲタク。そんな彼が送り込まれたのは前日に寝るまでやっていたゲームの世界だった。というお話。

・この物語はややハーレム臭いかもしれません。

・この物語はやや主人公に補正が掛かります。（主に戦闘力と魅力  
e t c )  
・少々過激な描写を含むかもしれない予定です。（R15程度？）  
以上の項目と駄文に耐えられる方は暇つぶし程度にご覧あれ。そう  
じゃない方はお戻りくださいまし。

## 迷宮之巻　かくて迷宮は彼を迎えし。

覚醒。目を覚ましたとき、真っ先に見えたのは美しいアオ色だった。思わず目を奪われてしまう程に、青、蒼、あお。しかし、その色に見とれている己に対して、記憶は違和を唱え続けている。脳いわく、お前の自室の天井はこんなに青くねーぞ、と。違和感を噛み砕き、咀嚼し、飲み下したところでようやく気付いた。慌てて上体を起こし、辺りを見渡してみる。周囲には緑の草花が生い茂り、背の高い樹木が壁のように聳え立っている。つまり、森だ。そして、自分は記憶が確かならばゲームをした後時計が午前3時を指していることを確認し、明日の講義に差し支えるからと慌ててベットで寝た筈だ。しかし、依然として周囲は緑に囲まれているし、自分は露に濡れている下草に触れ、その冷たさを感じている。ひやりとしたその感触に、心臓が荒く跳ね上がる。

「夢、か・・・？」

自分で口に出しておいてなんだが、その線は無いだろう。なにしろ、頬を撫でる風の感触や爽やかな樹木の香りがし、意識や視界がこれだけはつきりとしているのだ。これが夢なら現実さえも夢に見えてくるだろう。いや、実際こんな、夢のような現実もしくは現実のような夢、を体感している身としては、これが後者であることを期待したいのだが。残念ながらさっきから左手で抓っている頬が痛くてたまらないことを鑑みれば、これは

「夢じゃ、ないんだろっな・・・はぁ・・・」

特大に重い溜め息をついてみても、状況は全く変わらない。今日の  
一限目は出ときたい講義だったのになー、なんて漏らしつつ、立ち  
上がる。とりあえずは、人か、町を探して保護を求めねばなるまい。  
現在地の森は、とても貧弱一般ピーポーな自分が生活できるところ  
ではないだろうし。遭難したときはじつと救助を待つといいらしい  
が、今現在の自分はそのケースには当てはまらないだろう。ならば  
やるべきことは一つ。

「ひたすら歩くしかない、か。はぁ・・・」

最近は飲み会と講義に追われ、休日をもっぱら課題とゲームだった  
のだ。己の体力の落ち具合を心配して、彼は深い溜め息をついた。  
不思議と、未知の環境への恐怖はなく、倦怠感だけが彼を支配して  
いた。

探索を決意してからおよそ二時間程。すでに彼の心は折れかけていた。

「なんなんだよ、ここ。わけわからんぞ・・・異様にデカイダンゴ虫がいるし、人間サイズのイカが歩いてるし、宝箱落ちてるし、白骨死体とか転がってるし!!!」

と、これら以外にも細々とした奇妙な現象、生物を目撃した彼は驚きのあまりパニックを起こしかけていた。こんなところが地球にあるわけない、てかイカはデカイとめちゃう怖い、それより白骨死体が怖い、宝箱の中身錆びた短剣だったしよばい、でも護身用にもってきちゃったよヤバイ、てか宝箱とかまるでRPGみたいな、

ふと、そこで思考が止まった。

RPG？

昨夜のゲームの内容がフラッシュバックする。確か昨日やってたゲームって迷宮系のRPGだったよな、しかも一階層が森の迷宮だった。ダンゴ虫っぽい敵もいた筈、確かオオダンゴムシって名前だ。出てきたときまんまかよ!!!ってツツコんだ覚えあるし。デカいイカも出てきてた、名前はデビルスクイッド、一階で一番強い雑魚モンスターだった筈だ。ってことは・・・

「……、ゲームの世界なのかよ……！」

彼の心は碎ける寸前であった。ここが地球の秘境で、歩いてる内にどこかの村とかに辿り着いて、なんて、心の底に密かに湧き上がっていた淡い希望などが真向から叩き潰されたのだ。ここは異世界ゲームで、地球じゃない。それがわかったとき、起き上がったから今までにため込んで、見ない振りをしていた不安が一気にせりあがってきた。自分の存在が薄っぺらな2Dではない証明が、この森には無いのだ。なぜならこの森もまた、データによって組み上げられた存在だから。とにかく人に会いたかった。あつて、名を名乗って、自分が嘘の存在ではないことを確かめたかった。話ができるならこの際偽物だろうがデータだろうがかまわない。彼の恐怖は彼という器から水のように滴り落ち、自我という水面を揺らす。だんだんと足元が覚束なくなり、ついに膝を折る。頭を抱えて震える彼が、ついに崩れ落ちようとしたその時、

「きゃあああああああ……！！！！！！」

悲鳴が、静かな森に木霊した。彼は顔を上げると、即座に走りだした。己の、存在証明を求めて。疲労を感じせない矢のような速さで駆ける。インドア派で、体力が無い筈なのに。このときすでに、彼はこの世界に取り込まれようとしていたのだ。とある役割を与えられて。そのことを、彼はまだ知らない。

油断は無かった。大迷宮と呼ばれるこの迷宮は、現在確認されている階層だけでも13階層と多く、大陸の各地に点在する小迷宮とは格が違う。と、何度も聞いたことがあったし、ここに来る直前にも冒険者ギルドの職員から耳にたこができるほど聞かされた。そういうこともあって、入念に準備をしてきていたし、一緒に迷宮攻略にきたギルドメンバー達は、自分を含めて皆初心者ヒキナーだけでも、今日に備えてかなり特訓していたのだ。なのに。

「あ、ひ・・・ああっ、ひい・・・!!」

それなのに、何故全滅してるんだろう。歯を食いしばって後ずさりしても、歯の根が合わず、カタカタという音と堪えた悲鳴が口から漏れる。握りしめている剣さえ、ともすれば滑り落ちてしまいそうだ。怖い、怖い!! 周囲には仲間の倒れ伏す姿。戦士のマリーは麻痺毒を喰らい、殴打されて気を失った。狩人のタイムは、体当たりを喰らって樹に叩きつけられ血を吐き、そのまま気絶した。唯一無傷な仲間の、後ろにいる学者のカトレアは、私より二つ下なのに古代語魔法を使える凄腕だ。なのになぜ魔法を使わないのか。簡単な

こと、私と同じで歯の根が合わず、詠唱できないのだろう。いや、魔法を使おうともできずに震えているのかもしれない。ならば、

「わ、わたし、が。ま、まもら、なきや・・・」

そうだ、私が守らなきゃ、何のために騎士の訓練を受けたのかわからなくなる。皆を守るために厳しい訓練にだって耐えたんだ、だから、

「きゃああああああああ！！！！！！！！！！」

衝撃と、悲鳴。彼女の覚悟を嘲笑うかのように、敵はその長い触腕で彼女を打ち据えた。かろうじて間に合った大盾による防御を無いものとして扱うかの如く弾き、あまりの衝撃に彼女は悲鳴を上げたのだ。敵の名はデビルスクイッド、触腕による麻痺の一撃と高い攻撃力で森の一階層において生態系の王者に君臨しているモンスターである。そして森の王者は今まさに、自分のテリトリーへと侵入した不届き者に裁きを下そうとしていた。震える侵入者二匹にめがけて己の腕を振り上げ、

「うらああああああああ！！！！！！！！！！」

暴君は、横合いから猛進してきていた新たな侵入者に吹き飛ばされた。

ひたすら獣道を走り悲鳴の元に近づいてみれば、そこには女の子二人とイカの姿。普通の状態であつたら彼は突っ込んで行くことはなく、傍観に徹した筈だ。しかし、生憎今の彼は普通じゃなかった。最早視界には女の子達とイカのみ。そして、当初の目的は人間との遭遇、対話。つまり。

「うらあああああああああ!!!!!!」

しゃべりたい。しかしイカが邪魔だ。ならぶつ殺す。精神崩壊寸前の彼には理性と怖いものなどなかった。狙いを定めると走りこむスビードをそのままに錆びた短剣を腰だめに構えた、由緒正しき鉄砲玉タツクルによってイカを吹き飛ばし、周囲を見渡す。目についたのは鈍く光る銀。彼は一瞬で判断を下すと

「これ、借りる!!」

「えっ?」

泣きべそをかいている少女の剣を引つ搦んでぶん獲りながら再び疾走。起き上がりつつあるイカに向けて、横薙ぎに渾身の一撃を放つ  
!!

「っづあああああああああ!!!」

獣の如き咆哮とともに振り切られた剣はその切れ味を遺憾なく發揮し、森の王者をあつさり一刀両断に伏した。それと共に勢い余った彼はすつころび、顔面強打の後地面を三回転してようやく止まった。しばしの沈黙。

「あ、あのう・・・」

あまりの事態に茫然としていた少女達だが、助かったことには変わりない。内心で安堵の溜め息をつきつつ、イカを屠った青年に慎重に声をかける。すると、顔を抑えてうずくまっていた青年は、パツと顔を上げ口を開いた。

「あ、ああ。何?」

クールぶっている顔を上げた青年からは、たらたらと鼻血が迸っていた。あまりの酷さに少女の顔が一瞬引き曇る。

「・・・あの、お顔は大丈夫なんですか？」

あまりの惨状に騎士が尋ね、それに合わせて学者も首を縦に振る。それに対して大丈夫、と答えた青年は（その割にはまだ鼻を押さえていたが）再び口を開き、

「とりあえず、ここを離れないか？」

と提案。対する二人もそれに乗り、ひとまず迷宮をでて街に向かうことになった。倒れているパーティーメンバーを騎士の少女と青年で背負うと、一向は会話もなく迷宮から帰る道を辿って行った。なにせ、お互いになんと声をかけたらよいかわからなかったのだから。

そうして森を三十分ほど歩けば、迷宮の出口についた。迷宮の入口近くにある衛兵の詰所兼救護所となっている施設に怪我人を運び込むと、一同はほっと、息をついた。すると騎士少女がなにかに気づいたように口を開く。

「そういえば、自己紹介とお礼がまだでしたね。私はオリーブといいます。ギルド《グロリオース》のギルドマスターで、騎士ナイトのジョブを務めています。私達全員の命を救ってくださったこと、深く感謝します。ありがとうございました！！」

オリーブは、騎士に相応しい上品な物腰で、しかし感謝の言葉は念

を押すように力強く述べた。それについて、隣の少女も口を開く。

「カトレア、です。あの、その、あ、ありがとうございます！  
！」

それだけ言うと、カトレアはオリーブの後ろに隠れてしまった。どうやら人見知りをする方のタイプらしい。そして次に、青年はようやく当初の目的を達成できるという喜びを噛みしめながら、己の名をこの世界で初めて言い放った。

「俺の名前は三隅<sup>みすみ</sup> 香<sup>こう</sup>だ、コウでもミスミでも、好きな方で呼んでくれ。」

にっこりと笑顔を添えての自己紹介。なにせ、オリーブは綺麗な金髪を頭の高い位置で結い上げている、上品さと活動的な空気を併せ持つ美少女だ。カトレアも、紫のゆるいウェーブのかかったロングヘアに愛らしい顔立ちをした美少女である。人、それも美少女に会えたことでテンションが上がっているため、勢いのままかつこっけて自己紹介したコウだが、残念ながら乾いた鼻血が顔面にこびりつき悲惨なことになっていた。その証拠に、彼の顔を見たオリーブは一瞬怯えたし、カトレアに至ってはすっかりオリーブの背に隠れてしまったくらいだ。それはともかく、ようやく青年はこの世界に名を名乗り、そして人知れず世界は青年を己の一部と認めた。これから彼を待ち受ける運命は如何なる動きをみせるのか。それは、神<sup>せかい</sup>のみぞ知ることだろう。こうして、後の世に未長く称えられるであろう彼の物語は、締まりのない始まりを見せるのであった。

迷宮之巻　かくて迷宮は彼を迎えし。（後書き）

はじめまして、月海つきみのうみと申す者です。初執筆だったので、いかがでしたでしょうか？誤字、脱字、誤用があればこっそり教えて貰えるとありがたいです。はい。それでは、続きをかければまたお会いしましょう。では。

## 迷宮之貳 客人、冒険者となる。

現在、衛兵詰所兼簡易救護室は、混迷を極めていた。原因は三名の人物、うち一人は青年、血塗れの顔をそのままに救護室のベンチに座り込んで青い顔を（実際は乾いた血で蝦茶色だが）して俯いている。もう一人は少女、胸部フレストと腰部スカートを装備した典型的な冒険者だ。こちらこちらも青い顔をしてぶつぶつと

「私のせいで、わたしのせいで、わたしの、」

などと呟いている。超怖い。そしてもう一人は、

「じーーーーーっ」

見てる。こつち見てる、超見てる。助けを求める視線を横顔に感じながら、衛兵派出所、迷宮支部勤務のストック（26歳、妻子持ち、好物、妻の手料理。）は、冷や汗を掻きつつ無視した。だって怖いんだもん、あの雰囲気突っ込むの。ローブ姿の少女の視線を感じつつ、彼はまだ陽が高い位置にある空を仰いだ。ああ、帰って妻と娘の顔が見たい。そう思いつつ、背後の扉が軋む音を聞いて彼は希望を感じた。背後に現れたのは迷宮支部専属の医学者ドクターだ。彼はこの

状況を打破してくれる唯一の可能性に、問いかけた。

「どうでした、負傷者の具合は？」

「なに、たいした治療じゃ無かったよ。イカの傷や毒は一層で壊滅して帰ってくる冒険者の典型的な例の一つだから、治療しなれていい。しかも、イカにやられたにしてはすいぶん傷が浅かったから、夕方までには目を覚ますだろう。」

その言葉を聞いた瞬間、鎧姿の少女がパツと明るくなり、ローブ姿の少女はほっと息をついた。衛兵に福音を告げたドクターはゆったりと歩きつつ肩に掛けていた手ぬぐいを青年に放り投げて、顔をふきたまえと忠告して去って行った。この状況を打開してくれたドクターに対して感謝しつつ、衛兵は、夕方にまた来るといい。と言いつ放ち、陰鬱な冒険者どもを救護所の外へ追い出すのであった。エリカ、パパは頑張ってるぞ。サイネリア、今日は早く帰るよ。愛する娘と妻に念を送りつつ、彼は仕事に戻るのであった。

一方、救護室の外に出た三名は困った顔でお互いを見た。青年、コウは一旦落ち着いたことよって今の自分に起こっている現象について考えていたのだが、あれよあれよという間に日差しの下へと放り出され、考えが纏まらなくなってしまった。彼の推測が確かなら、この世界はゲームの世界だ。名前と職業ジョブを決めた六名のキャラを新生ギルドのパーティーとして、パーティー単位で主人公として扱い進める感じのゲーム。典型的なウィザードリイタイプの迷宮ゲーにおまけ程度のストーリーがついたモノというのが彼の認識だった。が、今に至ってはそんな知識は役に立たなかった。というか役に立ちそうな知識など彼は持ち合わせていない。なにせ、ゲームはこれから進めますよというところで、現実になってしまったんだから。ありえねーよと叫ぶ自分を押し殺しつつ思考を回すが、彼の脳みそは二トを決め込んで一切打開策を提示しなかった。すると、

「あの、そろそろお顔を拭いた方がよろしいですよ？」

鈴が鳴るような声が聞こえて横を見ると、困った顔をした少女、オリブと目が合った。その横ではローブの少女、カトレアも勢いよく首を振っている。俺の顔ってそんな汚いの？と聞くと、曖昧な笑みが返される。そんな事実にしし落ち込みつつ、さっきの医者風の男に貰った手ぬぐいで顔を拭くと、即座に手ぬぐいから乾いた音が聞こえた。驚いて手元を見ると剥がれ落ちた血の塊が手ぬぐいに張り付いており、コウは危うく腰を抜かすところだった。そんな彼の様子を眺めつつ、顔があんまり怖くなく、むしろややかつこいいこ

とに安堵した二人組がいたことを、ここに記す。そして、コウがさっぱりしたところで再度オリーブが口を開いた。

「あの、それですね、コウ殿。あなたさえよければ、私達からお礼がしたいので、着いてきて頂けないでしょうか？」

「えーっと、別にお礼とかいいよ、ホント。お礼が欲しくて助けたわけじゃないしね。」

嘘だ。できることならばお礼として助けてほしいのが本音である。しかしそれを先に言わないのは、悲しきかな、日本人の持つDNAが彼に謙遜という行動を取らせているのだ。人間は危機に陥ったとき、日常的な行動を取ろうとする傾向にある。つまりところこの男、テンパっているが故にこんなことを言い放ったのだ。無論、心中は大荒れである。言語化するならば、

「ふざっけんなああああああ！マジでありえん、俺ってばイカれてるぜ！！なにがお礼とかいいよ（キリッ）だよ！！死ぬ！俺死ぬ！！ってかほっというも俺いずれ死ぬじゃん！！！！ジージース！！神様たすけてえ……。」

と、いったところだろう。ちなみに彼は無宗教だ。しかし、彼を救ってくれる神はいて、以外なところから助け舟を出してくれた。

「あの、でも・・・、お兄さん、背囊とか持ってませんよね。服も見たことないモノですし、遠いところから来たんじゃないですか？知り合いが近くに住んでたりするんですか？」

その助け舟とは、カトレアだった。沈黙するコウを見かねて声を掛けてくれたらしい。彼女に続くようにオリーブにも説得されたコウは、内心ほっとしつつも彼女達に従うのだった。ちなみに、謙遜は良い方に捉えられたらしく、二人のコウに対する印象は、又けるけどいい人。という風になっていた。本人が聞けば喜びつつ落ち込むだろう。知らぬが仏である。

「なるほど。それで荷物も無しに迷宮にいたのですか。なんとというか、大変でしたね・・・。」

そんな言葉をオリーブに言わせたのは、コウである。目的地である彼女達のギルドに行く道程で、何故裸一貫で迷宮にいたのかを聞かれたコウは、焦りつつもカバーストーリーをでっち上げたのだ。内容は単純なモノで、とある東の小国の出身である彼は、冒険者に憧れてこの国に来たが、悪辣な冒険者崩れに騙されて荷物を奪われ、迷宮に放り出された。そんなときに、悲鳴が聞こえたので駆けつけた。という、微妙なストーリーであった。が、どうやら二人の同情を誘うことには成功した様だ。オリーブはむっとした表情で、許せない、非道な行為です！と居もしない悪党に対して怒りを燃やしているし、カトレアは、お兄さん、元気出してくださいっ！と、涙ぐみつつこちらを励ましてきた。それに対して罪悪感を覚えつつコウが苦笑いをしていると、ふいに宿屋のような建物に着いた。扉を押し開き中に入ると、宿屋の女将らしい恰幅のいい女性が三名を迎えてくれた。

「あら、オリーブちゃんにカトレアちゃん、お帰りなさい！って、あらあら、オリーブちゃんったら財宝じゃなくて男の子持ち帰るなんて！！やるじゃない！！」

「なっ！！ち、違います！コウ殿にはお世話になったからお礼をしようとして連れてきただけですっ！まったく、メイさん？」

「わかったわかった、悪かったね。で、コウちゃんだっけ？あたしはメイ、見ての通りココの女将さ。泊まってくなら後で声かけてち

ようだいよ?」

唐突にオリーブをからって真っ赤にしつつコウに声を掛け去って行った女将。すごい人だと思いつつコウは宿の二階の一部屋へ案内された。部屋にあるテーブルを三人で囲み、腰かけてからオリーブが喋りだした。

「ここに来るまで話はあらかた聞きましたが、そんな事情があるのなら、尚更放って置けません。それですね、コウ殿。提案とお願いがあるのですが・・・」

と、そこまで喋って一息つき、コウの目を見つつ、オリーブは再度口を開いた。

「単刀直入に言います。コウ殿、私達のギルドに入っただけなんでしょうか!?!」

「・・・え?」

なんとも以外な展開であった。オリーブは身を乗り出してこちらを見つめているし、カトレアは固唾を飲んで状況を見守っている。とりあえずコウは、理由を聞くことにした。

「なんで、俺を君達のギルドに？それに、提案なら分かるけど、おねがいつて？」

「それは、あなたが身ひとつで頼れるものが無いということと、冒険者になるのが目的であるということとを鑑みて、です。お願いというのは、そこに私達の事情が関わってくるのですが……」

そこで一旦言葉を切ったオリーブ。その横からやや悲壮な調子でカトレアの声が飛ぶ。

「実は、わたしたちグロリオーサは、人員不足で困ってるんです。」

以外だった。見た目が可憐な少女達がいるのだから、それを誘蛾灯にすればいくらかでも男なら引っかかりそうなモノだが。しかし、揃いも揃って疲れた顔をした少女達は幾分か低い声で話を続ける。

「私達グロリオーサは、今日の探索にでたパーティーメンバーが、そのままギルドメンバーなんです。命からがら帰ってきたことから分かると思いますが、実を言うと全員が初心者冒険者なんです。」

「しかも全員女の子なんです。だから皆から弱そうだと思われて、人が全然集まらないんです。でも！そこでお兄さんが現れた！！」

妙に力の入った語調でカトレアが告げる。お、俺？と、戸惑いつつ返すと、オリーブが深く頷きつつ語る。

「はい、あなたです。私達のパーティーは現在四人。迷宮の道幅などを考えると最大五人程度が普通の冒険者パーティーなのですが、現状では一人足りない。そこに、コウ殿。あなたが入ってほしいのです。人柄は今まで見させて貰いましたが問題ないですし、実力も、不意打ちでしたがあのデビルスクイッドを倒す程にある。しかも、私達に今必要な前衛であるという条件もクリアしている！どうでしょう。ギルドに入って頂けないでしょうか！？」

「わたしからも、お願いですっ！お兄さんなら怖くなさそうだし、それに、お兄さんの困ってる理由も解決できるんだよ？ダメ？」

こちらを見つめる少女達は真剣な眼差しでコウの動向を見ている。おそらく、俺を助けたいという理由と、人員不足という理由はどちらも本当なんだろう。と、そこまで考えてから、コウは思考を手放した。なにせ、最初から答は決まっているのだから。人としてこんなに求められているのは嬉しいし、それが美少女なら尚更。それに、現実的な問題として、無一文の無職では生きていけないというものもある。つまり。

「分かった。俺でいいなら、君達のギルドに入れて貰いたい。」

そういうことである。答えを聞いた瞬間、コウの目の前の彼女達は手を取り合って喜びあい、それを見たコウにも自然と笑みが浮かんだ。それから少し間をおいてから、改めて挨拶をした。

「では、改めて。ギルドマスターのオリーブです。よろしくお願います、コウ殿。」

「パーティーの後衛をしています、セージ学者のカトレアです。よろしくです、お兄さん！」

「ああ、よろしく、二人とも。ところで、質問なんだけど。」

ふと、コウに疑問が湧いた。自分が入ることを仲間に聞いてから採決を取った方が良くはないかと。それに対する答は、

「いいんです、彼女達もずっと新しいメンバーを探してましたから。

」

とのことだった。そうこうしている内に時間は経つもので、太陽はすでに中天から傾き始めている。三人は宿を出ると救護所に向かうことにして、歩き始めたのだった。

迷宮之忒 客人、冒険者となる。(後書き)

おはこんばんにちは、月海苔です。今回は冒険者になる経緯でした。やや冗長だったでしょうか？ちなみに関係ないことですが、キャラの名前は全部植物から取っております。一応ギルド名も。暇でしたら調べてみても面白いかもしれません。と、蛇足でしたね。それでは、またお会いしましょう。では。

迷宮之参 備えあれば憂い無し。

燦然と輝く太陽が照らす石畳は、そこに暮らす人々の生活をその身に刻み、擦り減り、道行く人に歴史を感じさせてくれるような、穏やかな風合いのくすんだ白に染まっている。海に程近いこの街の壁は漆喰で白く輝いており、それが、目が覚めるような青い海や空、時折見える並木の緑をより一層際立たせているようだ。美しい、まるで絵画のような世界だが、そこに一つのエッセンスを加えることよって、良い意味でこの世界は絵画足りえなくなる。それは、何か。

「いらっしゃい！！今日は水揚げされてから間もない魚ばかりだから、新鮮でおいしいよ！！今日の昼飯に一匹、今日の晩飯に一匹。ウチの魚を買っていつとくれー！！！！」

「おう、その坊ちゃん嬢ちゃん！！隣の魚屋は大したことないぜ、昨日は売れ残りを自分の晩飯にしてたくらい売れてなかったしな！！その点ウチは鮮度よし、ツヤよし、味よしの野菜がたくさん！！！！今日の晩飯はウチの野菜を使っとくれよな！！」

「て、てめえ！！言ったな、この！！一昨日は赤字だなんだって騒いでカミさんにげんこつ喰らってたくせによお！！この、菜っ葉くせえハゲ親父が！！！！」

「い、言ったなこの蛸坊主!!!もう我慢ならねえ!!!!!!今日こそは決着つけてやんよ!!!」

「あんたたち、うるさいよ!!!客の前でなにやってんの!!!!!!」

「うへえ、ごめんよ母ちゃん!!!!!!」

賑わい、である。色とりどりの布を使った鮮やかな屋根に、これまた色とりどりの商品が並ぶ市場は、美しい街並みに命を吹き込むかのように騒がしく、活気があった。ルピナス小国連合に周囲を囲まれ、しかし独立した国家のように扱われている都市にあるこの街は、大迷宮という人を惹きつけてやまない要素の他にも、とても魅力的な要素の詰まった街である。迷宮都市、ブーゲンビレアの城下街。なお、観光の際は迷宮王ヴェロニカ・ヴィクトリアスの時代に建造され、今もこの街の権威を司る王族が住まう王城を見ていくと良いだろう。君はそこで都市一番の可憐さを誇るといふネリネ・ヴィクトリアス王女を探してもいいし、探さなくてもいい。と、まあこの街に関してはこの様な雑誌などに載っていますので、暇ができれば読んでおくといいですよ。」

そう言って雑誌、『ルピナスうお〜か〜春の観光特集』を閉じたのはオリーブだ。救護所に行く前に寄る所があると言うので、目的地までの雑談がてらに街の話をしていたのだが、途中からどこからと

もなく雑誌を取り出し説明し始めたのだ。どうも彼女はこの街が相当好きらしい。なにせ話をしているとときの彼女の目は輝いていたから。途中でハゲ親父どもの喧嘩に遭遇しても動じることなく話していたのを見て、焦りつつコウは二重に驚いた。この世界に雑誌があるということ、オリーブの語る世界観が知っているゲームのものとは少し違ったからだ。コウが知っているこの街の背景事情<sup>せつじ</sup>では、迷宮都市ブーゲンビリアは王政では無かったのだ。まあ、その事實はコウの現状に直接作用するわけではないのですが、記憶の底へ沈んだが。この辺りに彼が今までどれだけいい加減に生きていたかが滲みでているが、残念ながら人を疑うことをあまりしないオリーブとカトリアはそれに気づかなかった。それはともかく三人は市場を進み、大きな店の多い場所へ抜け出た。そこで、人混みに流されなように注意し、口数の少なくなっていたカトリアが口を開いた。ちなみに彼女はコウの胸あたりまでしか背が無い。

「やっと抜けました、ふう……。さて、お兄さん。お兄さんはグロリオサに入り、冒険者になりました。ですが、お兄さんには迷宮に挑むにはまだまだ足りないものが多いのです！それがなにか分かりますか？」

「え？・・・うん、き、気合とか？」

バカ丸出しの解答である。しかし、そんな解答にもめげずにカトリアは続ける。

「ズバリ、お兄さんに足りないものは装備です。今の異国の装いで冒険者には見えませんから、装備を揃え、その上で私達の仲間に出会ってもらうですよ。さつきは大丈夫と言いましたけど、実は仲間に一人気難しいお姉さんがいるですから……。」

とのことらしい。まあ、灰色のスウェットパンツと無地のＴシャツで戦う冒険者なんていないだろうからいいのだが、一つ問題があった。

「や、それは良いんだけど、さ。装備ってお金いるでしょ？俺、今お金無いんだけど……。」

つまりそういうことだ。現在無一文で暫くヒモ野郎決定な身としてはこれ以上借金を増やしたくないし、コウの心情としては優しい彼女達に迷惑を掛けたくないのだ。しかし、そんな彼に対してオリブは笑顔で話しかける。

「コウ殿、大丈夫です！実を言うと私達、人は足りていなくても、お金では困っていないんですよ。」

そう言って彼女が取り出したのは巾着袋。その中には大量の銅貨、銀貨、金貨があった。啞然とするコウを差し置いて少女達は本人そ

つちのけでコウに似合う装備を考え、はしゃいでいる。こと買い物という一点において、女は男よりも強い。この法則は、どうやら異世界でも同じらしい。

夕方。街は夕日の赤に染まり、市場も閑散としている。遊びまわる子供たちは家路につき、穏やかな静けさが街を包んでいる中、三人は救護所に向かっていた。

「しかし、装備を整えると人の印象も変わるものですね。先ほどまでのコウ殿は優しげな雰囲気でしたが、今のコウ殿にはこう、凛々しいといった印象を受けますね。」

そう告げたのはオリブだ。満足そうにコウを見ている彼女のプロデュースで装備を固めたコウであったが、見た目にはなかなか冒険者らしさ、とでも言うべきものが漂っている。鉄製の胸部鎧プレストに、黒色の丈夫そうなワイドパンツと同色のブーツで足元を、腕は肘までの革製手甲レザークロップで固めている。腰元には幅の広いベルトに吊るした片刃の長剣があり、より強く彼の冒険者らしさを演出しているように見

える。が、それら全ての調和を崩すかのように表情が死んでいた。なにせ、一時間以上着せ替え人形にされた挙句、武器を選ぶ段階では延々と剣やら槍やらを振らされていたのだから。彼と彼の上腕二頭筋は休息を欲しており、しかし、今のところ望むものは与えられそうになかった。そうして少女二人、半死体一名で歩いている内に救護所へと着いた。そこで直立している衛兵は三人に気づくと一瞬嫌そうに顔を顰め、彼等の中に案内した。救護所内の病室に入ると木製のベットの所で欠伸をしている少女と、貧乏揺すりを繰り返している少女がいる。二人はこちらに気づくとそれぞれ笑みと顰め面を浮かべた。

「お、お嬢様！……！嗚呼、すいません、お嬢様を守るのがわたくしの使命ですのに、この様な無様を晒してしまうなんて……！！！！この失態の罰がどんなものであると、タイムめは耐えて見せますッ！！お嬢様、どうか愚かなわたくしめに罰をくださいまし……！！！！」

まず口火を切ったのは貧乏揺すりをしていた方だ。大げさかつ芝居がかかった仕草でオリーブの足元に縋りつき、苦痛の表情を浮かべている。その情景に苦笑いを浮かべているカトレアとあっけにとられているコウに、声がかかった。

「お、そっちの兄ちゃん是谁なんだ？見た感じ冒険者っぽいけど、どういいう知り合い？」

そうやって近づいてきたのは欠伸をしていた方の少女だ。日に焼けた小麦色の肌に長い焦げ茶色の髪が南国の人々を思わせる美人だ。均整のとれた肢体を皮の胸当てと巻きスカートで包んでおり、腰には何色かの腰布と紐飾りを巻いている。胸下から腰までに布地は無く、括れを強調するような色気のある見た目と裏腹に、口調や笑顔がカラツとしていて少年のようである。そんな彼女の問いに答えるべく、オリーブは足元の少女を引き剥がして話し始めた。

「まずは、全員無事に帰れたことを喜びたいと思います。タイムも、マリーも、傷が深くなかったのは幸いでした。さて、コウ殿、こっちの二人が残りのギルドメンバーです。手前にいる方がマリー、床に座っているのがタイムです。で、こっちがコウ殿。私達を救ってくれた恩人であり、そして・・・」

オリーブはそこで言葉を切り、大きく息を吸ってから口を開いた。

「なんと、グロリオーサ待望の五人目のメンバーになってくれた方なのですー！！！！」

その言葉に対してマリーは喜び、タイムは微妙な表情を作った。そして、彼女はコウを睨みつけて吠える。

「お嬢様！！なぜ、こんな男をギルドに迎えるのです！？わたくしは反対ですわ！！」

その言葉に対してコウは驚いたが、他のメンバーはやっぱりといった顔をしている。そんな中、オリーブはタイムを説得に掛かり、ギャンギャン吠える彼女とオリーブの会話を聞き流しつつ、コウはふと疑問に思ったことを聞いてみることにした。

「なあ、カトレア。オリーブとあの娘って、どういう関係なんだ？お嬢様ー、とか言ってたけど。」

「実を言うとオリーブさんは、さる名家のお嬢様なんです。タイムさんはその従者で、何と云うか、その、すごくオリーブさんのことが好きで、オリーブさんに近づいてくる男の人を嫌ってるんです。それで、何かしら理由を付けてお兄さんを批判すると思ったから先に装備を整えたんですよ。」

そう言うとカトレアは溜め息をついた。どうやらグロリオーサの不足の原因にはタイムも関わっているらしかった。そこへ、オリーブがタイムを伴い寄ってくる。タイムはコウの前に出ると、不満だらけです、といった表情で

「……<sup>ハンター</sup>狩人のタイム、ですわ。これからよろしく願います。それとお嬢様に手えだしたら容赦しませんから、それだけは心に刻んでおいてくださいまし。」

と告げた。金の巻き毛は豪奢な雰囲気を出しており、口調も相まってオリーブよりどこぞのお嬢様に見える。ただ、そんな印象を裏切るように濃緑の軍服の様な服を着ており、それが彼女の印象を大きく変えていた。そんな彼女に乗っかるようにマリーも自己紹介をする。

「あたしはマリー、<sup>ファイター</sup>前衛で戦士のジョブをしてる。ま、よろしく頼むよー!」

「ああ、よろしく、二人とも。俺はコウ、好きな呼び方で呼んでくれ。」

よろしく、と返してくれたのはマリーだけで、タイムはそっぽを向いている。なるほど、気難しいお姉さんとは彼女のことだったのかと思いつつ、ちょっとだけムツとするコウであった。

とりあえずの自己紹介を済ませ、救護所を出たグロリオーサの面々はメイの宿屋に向かって歩みを進める。太陽はすっかり沈んでおり、しかし、酒場や小料理屋のある辺りはまだ明るい。これは、迷宮から帰ってきた冒険者達が屯しているからだ。そんな一画にあるメイの宿屋の一室で、コウはベットに転がりながら天井を見つめていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今、彼の中には様々なモノが渦巻いていた。不安、期待、興奮、緊張、そして、疑問。波乱の一日が終わりこうして一人になってみると、やはりこれは夢ではないのかと考えてしまう。どうしても、帰れるのではないかと思ってしまう。しかし、現実<sup>りせい</sup>は彼に残酷な今を示し続けているし、ソレに立ち向かわなければ彼は生きていけない。寝返りを打ち、机の上に置いた剣をじつと見つめる。この世界において、月光に輪郭を浮かび上がらせているソレだけがコウの頼りだった。疲れ切った体は安息の闇にコウを誘い、瞼が落ちる。明日は迷宮に挑むと聞いていたので、早く眠った方がいいだろう。そう判断したコウは、睡魔に身をまかせ、ひと時の休息を得るのだった。

**迷宮之参 備えあれば憂い無し。(後書き)**

おはこんにちばんわ、月海苔です。さんざん迷宮迷宮書いてるのに、三話になっても迷宮に入れません。戦闘なんて一回しかしてないです。うーん。しかし、次回は多分迷宮に入れると思いますので、よろしければ海苔野郎のクドイ文章にお付き合いくださいます。では、また次回に。

迷宮之肆 勝利は美酒よりも甘く。

寝返りを打つと、不意に差し込んだ陽の光に眼が眩んだ。思わず閉じていた瞼をさらに瞑り、顔を顰める。安穩とした微睡に身を任せつつ、今日の予定に思いを馳せる。確か今日は大した予定は無かった筈。いや、午後から講義入ってたっけ？じゃあ昼まで寝るかな、とそこまで考えたところで。いつもはカーテンを閉め切って寝るので陽光が顔に当たるはずなど無いことに気づいた。一気に意識が覚醒し、跳ね起きると。

「……はあ。」

朝一番に口からでた言葉は、特大の溜め息であった。コウの異世界生活は当たり前のように二日目に突入していた。本人の意思を無視して。

宿屋で朝食を済ませ（普通の洋食であった）、グロリオーサのメン  
バーと合流してまずは冒険者ギルドに行くことになった。なんでも、  
迷宮の内部に入り、探索をするのには国営冒険者ギルドの許可証が  
いるらしいのだ。そんなこともしりませんか？とでも言いたげなタ  
イムの視線をスルーしつつ、コウ、カトレア、マリーの三人でギル  
ドへ、残りの二人は探索の準備をすることとなった。朝の活気ある  
市場を通り、装備を買った職人区画を過ぎた所に冒険者ギルドはあ  
った。なるほど、国営の名に相応しい大きさである、とコウは関心  
した。この街では珍しいと言える三階建ての建物は、多くの人が出  
入りしている。そのどれもが武器を下げ、鎧を着こみ、これから始  
まる冒険に眼を光らせて期待している。大学のキャンパスとは違っ  
た活気だ。と、周囲を眺めていたところでマリーに首根っこを掴ま  
れた。

「ちょっと、あんまりキョロキョロしてると変なのに絡まれるよ？」

とのことだった。慌てて伏し目がちに周囲を確認すると、朝から飲  
んでくれている（ギルドの一階は酒場も兼ねている）破落戸風の冒  
険者が数人、喧嘩の相手を探すように周囲を見渡しているのを見て  
冷や汗が出た。あのままだと絡まれていたかもしれない。マリーに  
お礼を言いつつギルド内に入り、受付嬢のいるカウンターに向かう。

「いらっしゃいませ、冒険者ギルドにようこそー！」

「あの、冒険者登録をお願いしたいんですが。」

「はい、冒険者登録ですね？かしこまりました。では、こちらのカードを握って、自分の名前を思い浮かべてください。」

そうやって差し出されたのは一枚の金属製のカードだった。言われた通りに握り、名前を思い浮かべると淡い光が握りこんだ手から出ている。手を開くと、そこには細々とした記載があるカードが出来上がっている。コウにはどういった仕組みなのかさっぱり理解できなかった。

「カードに記載は浮かびましたか？・・・はい、冒険者登録を確認しました。ギルドランクF、グロリオーサのコウ様、ジョブは剣士ソートマンです。これから、がんばってくださいね？」

励ましの言葉と共に手渡されたカードには、自分の顔と所属ギルドが大きく書かれている。裏面には再発行の際には銀貨一枚が必要で、などの、利用に際した注意が書かれている。クレジットカードのようだと思いつつソレをズボンの収納スペースに仕舞うと、後ろから大きな声が聞こえた。何事かと思いい振り向くと、先ほど見掛けた破落戸共が一人の冒険者に絡んでいた。

「おいおい、カタナなんかぶら下げちゃってよう、一端の冒険者気取りかよお嬢ちゃん？」

「……気取り、では無い。私は冒険者だ。」

対峙しているのは二人の人物。一人は飲んだくれの破落戸で、明らかに行き過ぎた酒量を摂取しているのが見受けられる。もう一人の人物は少女、緋袴に太刀を下げている、黒髪の美しい少女だった。周囲を破落戸の仲間が取り囲み囂し立てている中、少女の表情はピクリとも動いていなかった。しかし、それは怯えているからではなく怒りを抑え込んでいる故の風である、気づけなかったのが破落戸共の失敗だった。さらに少女を煽ろうと破落戸が口を開いた瞬間少女の手元がぶれた。瞬き程の時間が経つと、破落戸は酒場の壁にぶつかり伸びており、少女は何事も無かったかのように立ち去っている。もはや彼女の道を塞ぐ者は居らず、その場にいる誰もが彼女に畏怖の念を向けていた。

オリーブ達とは迷宮前で落ち合うことになっていたので、三人は雑

談をしつつ迷宮へと向かっていた。もちろん、話題は先ほどの少女のことだ。まず、コウが口を開いた。

「しかし、さっきの女の子すごかったよな。こつ、手がぶれたって思ったら破落戸が吹っ飛んでさ。」

「ああ、ありや当然だね。酒場で管巻してる破落戸程度が、冒険者ランクAの人間に勝てるかよっての!」

「そつか。ちなみに、冒険者ランクって?」

「え?」 「え?」

なにそれこわい。ではなく、以外だという表情をしたマリーに変わり、カトレアが答える。少女曰く、冒険者ランクとは冒険者の強さや有能さの目安になる値らしい。迷宮を一階層突破したとか、特別な魔物を狩ったとか、珍しいアイテムの発見とか様々な理由で上昇するらしい。ちなみに、ギルドに加わっている冒険者は個人のランクではなくギルドのランクがカードに表示されるんだとか。ぼやっとした表情で聞いているコウだったが、ふと疑問が湧いた。

「冒険者ランクのことは分かったけど、さっきの娘のランクを知っ

てるのはなんでなんだ？」

ああ、それは・・・と、マリーが口を挟む。

「有名人だから。この一言に尽きるね。さっきの破落戸は知らなかったみたいけど、《首切り》ヒナギクって名前はこの街の冒険者なら誰でも知ってるもんなんだ。」

「へえ・・・。」

あんな美しい少女にそんな物騒な名前があるとは・・・。と、戦慄するコウだった。どうやらこの世界では見た目なんて信用に値しないようだ。そんな会話をしていると、いつの間にか迷宮前に着いていた。こちらを見つけたオリーブが小さく手を振っている。合流し、各々にアイテムを配分しつつある程度の作戦を決める。コウは傷を回復させるポーションを二本受け取った。鮮やかな緑色の液体は現代日本人としては健康被害が気になるところだ、着色料的な意味でまあ、ファンタジーだから大丈夫だろうけれど。そんなことを考えつつ隊列を組む。前衛はコウ、オリーブ、マリー。中衛にカトレア。後衛にタイム。といった、矢印型の隊列だ。これには勿論意味があり、中衛のカトレアを前衛で守り、タイムが敵の足を止めてからカトレアの魔法を命中させるといった作戦だ。ちなみにタイムは背後からの急襲を警戒する役割も持っている。お嬢様の背中はずたくしが守りますわ！と、当の本人は張り切っていた。

迷宮の道は広く、美しい自然と背の高い木々が醸し出す荘厳な気配が人を不思議な気分誘う。警戒をしつつ進む一行は、不意に足を止めた。右手前方の茂みに怪しげな動きを察知したからだ。盾を持つオリブが前に出て剣を抜くと、茂みから人間大の影が飛び出してきた。ソレは触腕をくねらせつつこちらに向かってくる。オリブは自分の頬を伝う汗を感じた。前回は緊張して碌に抵抗できなかったが、今日は違う。大きく息を吸うと、気合と共に声を張り上げた。

「作戦開始ッ!!!」

声に反応して飛び出したのはマリー、両手に握った槍を鋭く突き出し、イカを脇から刺すと即座に後退する。マリーの動きに一拍遅れてイカの腕が地を叩き、土くれが周囲に散らばった。意識がマリーに逸れたのを感じると次にコウが飛び出した。その動きに対してイカが腕を薙ぐが、コウは大きく飛びのいて回避した。そこに、

「はあああああ!!!」

咆哮と共に盾ごと突進したオリブのチャージが炸裂した。鈍い音と共に倒れたイカに対して風切り音を伴った矢が刺さり、その腕を地に縫い止める。タイムの弓撃によって身動きのできないイカがもがく中、朗々と聞こえてくるのは詠唱だ。

「鉄と大地で火花を散らせ、其は紅きもの、揺らめく陽炎！」

カトレアの手に握られた杖の先に赤い光が灯り始める。ソレは次第に膨らみ、輝き、

「汝、焦熱の刃！フレイム！！！」

解き放たれた。指向性を持った炎の刃はイカを包み込み、一瞬で焼きイカと化した。食欲をそそる香ばしい薫りが立ち昇り、辺りに広がりは始める。オリーブは剣を収め、グツと手を握りこんだ。そう、自分達はあれほど苦戦した相手に勝ったのだ。無傷で。その場の全員が勝利に喜び、怪我無く勝てたことに安堵するのだった。一方コウは、自分が全然活躍していないことに密かに落ち込むのであった。

初勝利から数時間、グロリオーサの面々は探索を切り上げ、帰路についていた。それぞれが疲れを見せつつも満足そうな表情をしている。そんな中、コウは難しい顔をして考えこんでいた。探索の途中、



はマリーの名を怒鳴りつつ追い回し、カトレアは己の胸元を見て落ち込み始める。タイムはここぞとばかりに冷やかな視線をコウに突き刺してくるし、散々である。だが、

「楽しい、な。」

そう、楽しい。こちらの世界にきてから今までで、ようやく肩の力が抜けたような気がする。このメンバーと居れば、見知らぬ世界も楽しく生きられそうだ。心に温かいものを感じつつ、コウは真っ赤になっているオリーブを宥めにかかり、平手打ちをもらうのであった。最後まで締められない男である。

迷宮之肆 勝利は美酒よりも甘く。(後書き)

おはにちばんわ。月海苔です。やっと迷宮に入れましたよ！戦闘もしたよ！えらいもっさりした戦闘でしたが。ここまで(四話まで)が序章、プロローグみたいなもんで、説明っぽい文が多かったです。ここからは多分サクサク行けると思います。多分。それでは、また次回に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2498x/>

---

迷宮エトランゼ

2011年10月23日06時15分発行